

## 第2回 中国あれこれ (講師：江原孔江 理事)

日時・場所：2018年12月19日(水) 午後1:30～3:30 本部事務所 会議室

参加人数：13名(会議室)+4名(長崎支部)

### 中国あれこれ(続)

江原孔江



「天の半分を支えるのは女性である」

これは毛沢東主席の言葉としてよく知られています。この言葉は中国語では「半边天」と呼ばれ、中国13億人の女性に対する考え方として表現されています。男性と同じ労働条件で社会を支えてきている中国の女性たちも、自分たちは「半边天」である、という自覚があるようです。文化大革命を経て改革開放路線を歩む中国は、2019年に建国70周年を迎えています。

日本では、第2次世界大戦が終わり、戦前から市川房枝氏を中心として婦人参政権運動が活発に展開してきた経緯もありましたが、新憲法が発布され、女性たちには当たり前のように参政権が与えられ、男女平等の高等教育を受ける権利も得ることができました。

中国の女性たちも日本の女性たちも、大きな歴史の流れのなかで、女性の権利を得てきましたが、長い間に培われた風俗や社会慣習、常識、通念のなかでの日々の生活のなかにおいては、多くの苦難を経てきています。

私は、夫の中国駐在に伴い、大連で6年半、北京で4年、上海で1年という日々を過ごす間、実に多くの中国の女性たちと出会うことができました。

大連滞在は1990年代でした。改革開放は1978年12月でしたから、まさに13億の人々が鄧小平の掛け声「先に豊かになれる人がまず豊かになりましょう。そして後から来る人々を助けて行きましょう」という一国二制度の経済発展の真っ最中でした。次々と古い建物を壊し、高層ビルの建築ラッシュが続き、大連は「北方の香港」、「北方の真珠」というキャッチフレーズを掲げて全員マラソンの状態、のように見えました。

中国は、1978年に改革開放路線が宣言され、文化大革命後初めて公開された外国映画は「君よ憤怒の河を渉れ」という高倉健さん、中野良子さんが活躍する映画でした。無実の罪を着せられて東京や北海道を逃げ回る高倉健さんを、ただひたすら信じ支え助ける金持ちの娘に扮する中野良子さんに、現代の日本の女性のイメージを重ねた中国の人々。自家用飛行機を持つ大牧場を経営する富裕な父親や北海道の大自然、高層ビルが立ち並ぶ新宿西口の大都会を逃げ回る高倉健さん扮する主人公を馬に乗って助け颯爽と去る良子さんの姿に、当時、外国の情報が全くなかった中国の人々13億人のうち、約8億人、つまり大人の人々すべてが熱狂したといわれる日本の映画でした。私が大連に住み始めたのは1989年ごろでしたが、当時の大連の人々は日本人と知るやいなや、「高倉健、中野良子を知っている」とニコニコしながら中国語で話しかけてきました。

当時、大連という地理的位置も日本との歴史もほとんど知らないまま、なにか言われたら「すみません、ごめんなさい」と頭を下げるしかない、と思っ



ていた私にとり、この大歓迎ぶりに大変当惑したものでした。そして、中国語を習い始め、町の人々と知り合い、「大連日本商工倶楽部」の会報の編集に携わるようになって、この激動の時代を生きる大連の女性たちへのインタビュー記事を掲載することにしました。

当時の中国は、日本の映画だけでなく、テレビ番組も次々と上映放映されるようになっており「おしん」は特に大きな反響をよんでいました。経済発展の波が押し寄せていた大連の女性たちの生活にも「おしん」をロールモデルとしたような女性が大きな話題となっていました。それは李桂連さんという大連大楊創生アパレル会社の総経理（社長）でした。そこでまず、この方にお会いしてみました。貧しい生まれ・育ちのなかから、ミシンを手に入れ、紳士服の縫製を始めて大成功した女性で、全く「おしん」そのものの人生で驚いたものでした。今回ご紹介するにあたり現在何をされているのか調べてみたところ、なんとさらに大企業に成長され、2008年の北京オリンピックでは米国選手団の制服3000着を制作。また2012年のロンドンオリンピックの際にも米国代表団の入場行進の際の制服をデザインしていました。現在では中国の女性大富豪10傑のなかに入っているようです。

李桂連さんを始めとして、フライトアテンダント、ファッションモデル、TVアナウンサー、市政府の対外貿易部長、経済開発区主任等々、若く澆刺とした、時代を駆け抜けている女性たちに次々とインタビューし、生き生きと活躍している女性たちの姿を垣間見ることができました。

まさに経済発展の半分を支えてきた「男女平等」の女性たちの多大なる貢献により、驚くべき程急激な社会変化と経済発展を遂げてきている中国。2018年にはGDP世界総生産第2位となった中国。ではその現代に暮らす女性たちは、日々の暮らしに満足しているのでしょうか。

「女子と小人は養い難し」という儒教の価値観が根強く残っているのは、日本の古い価値観がいまだに残っている社会と酷似しています。家事・育児はすべて女性たちが「賢く」こなすことを望まれ、一方、社会的な仕事は「働かざる者、食うべからず」という共産主義社会の価値観のなか、男性と同じ条件での労働を当たり前のように要求される女性たち。万一の離婚に備え、経済的基盤を確保しなければならない不安定な結婚生活や、出産後の“座月子”という社会的な風習・慣習も根強く現実の生活として女性たちを縛り続けています。



1975年に“国連婦人年”が制定され、その後の10年間を「国連女性の10年」として、世界中の女性たちが権利や平等を叫んだ70年代から80年代の時代がありました。皮膚の色の違い、宗教の違い、経済発展の度合いの違いを超えて、世界の女性たちが手を取り合ったのは、世界中の女性たちにとって、このような日常生活がほぼ同じ状況だったからでした。

では、女性の権利が社会的概念として、いつ誰によってどのように誕生したのでしょうか。発祥の地と呼ばれるのはアメリカ合衆国ニューヨーク州のセネカフォールズという町です。当時アメリカでは奴隷制反対運動が盛り上がり、1840年に反奴隷制度の世界大会がロンドンで開催されました。セネカフォールズに住んでいたエリザベス・キャディ・スタントンさんは、友人たちと刺繍をしながらお茶会を開いて世間話に花が咲いていたとき、このロンドンでの反奴隷世界大会のことを知りました。そこで、新婚旅行にロンドンに行き、この世界大会で反奴隷を叫ぼうとしたところ、新郎は会議場に入れたものの、新婦のエリザベスは女性だからという理由で会議場に入れてもらえなかったのです。会議場の門前にいた同じような女性たちは奴隷制に反対する前に女性差別に反対しましょう、と、仲間を作り、8年



後の1848年7月19日にセネカフォールズの教会近くの広場で世界最初の女性の権利大会を開催したのです。会議に先立ち、女性の権利宣言まで「独立宣言」を元に起草したのです。その主な内容は、女性が離婚する際の子どもの親権を得る権利、虐待をする夫に対して法廷で証言をする権利、女性がさまざまな職業に就く権利、その給料を夫に渡さず自分が保持する権利、そして当時最も論議を呼んだという「女性の投票権」を主張したのです。

毎年3月8日は世界女性デーで、中国では特別に大きな、祝日並みの扱いをしている日です。もともと、世界社会主義大会から誕生したこの女性デーには、すべての女性たちは半日休みやプレゼントをもらったりします。中国では、かつて、男性と同じ労働をする女性たちを気遣って、夕食の炊事をするのは男性たちが多くともいわれてきましたが、いまや“小皇帝”と呼ばれ両親や家族中から大事に育てられた一人っ子世代が結婚し家庭を持つ時代となり、若い人々の間では、誰が家事をするべきか、大きな課題が生まれています。富裕層ならお手伝いさんを雇うというのが解決策だそうですが、一般の人々にとっては、結婚生活に疲れ、離婚の大きな原因にもなっているようです。この状況も、世界中の女性たちの共通の課題となっているようです。



#### 【アンケートから】

- ・軽快な語り口で、楽しく知識を得ることができました。中国は大きすぎて、ぼんやりしたイメージしかありませんでしたが、少し身近になりました。知ることは楽しいですね。(R. I)
- ・女どうしのおしゃべりから生まれるものがある、というすばらしい実例を教えられたことも印象的で来てよかったと思いました。中国の女性が専業主婦にあこがれているとは知りませんでした。現代の若い日本女性にもそういう方々は多いので、どうして共通してそうなるのか要因を探ってみると「女性の自律」に必要な条件もみえてくるのかしら、と思ったり…。(N. A.)
- ・中国の話、特に女性の話がおもしろかった。市川房枝さんとベアテさんの話まで聞けて感激しています。(Y. W.)
- ・前回に続き拝聴させて頂きました。今回もまた面白かったです。さまざまな中国のこと、生の歴史を伝えて頂いたように思います。一般の方の参加がもっとあった方がよいと思いました。(N. K.)
- ・いつもながら多岐にわたり、どれもじっくり聞きたい内容でした。次回を期待!! (S. T.)
- ・江原さんの話、とても面白かったです。マスコミ等で報道されている中国とは違い、現実の中国の若い方々(一人っ子で甘やかされて育った人々)の結婚や子育ての大変さを聞き、考えさせられました。日本の若い女性達の生きづらさと共通点も多いので、国境を越えて両国の若い人達が話し、未来の家庭や社会や平和について協力できる機会が増えればと思いました。中国に対して正しい情報や知識が増えれば、中国への誤解も減ると思います。(T. K.)
- ・大変面白かった。中国の現代女性の事情がよくわかった。(K. H.)

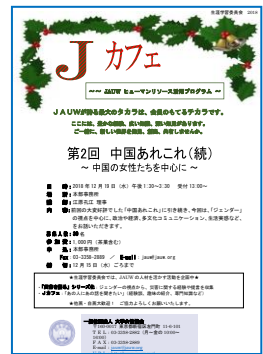
#### 【当日の様子 内容について】

江原孔江理事に「中国あれこれ(続)」と題し、前回に引き続き、現在の中国事情を“女性”という観点からお話をいただきました。

日本では、女性が社会進出していく上で、子育て期間をどう乗り切るか、がネックになっているのが現実です。共産主義国という日本とは違った社会制度の国では、男女ともに働くのが当たり前という環境ですから、子育ては、さぞかし恵まれたサポートがあるだろう、と漠然と思っていた人にとって、今

回のお話しいただいた中国の現状は、大変ショックを受けた内容ではなかったでしょうか。

社会制度が変わっても、“風習”という壁はなくなり、家事・育児は女性の仕事、その上で、男性と同じ条件での労働を要求されているという現実。一体、どんな社会制度なら、男女が同等の権利を持ち、同等の義務を自覚し得るのか。その上、一人っ子政策により、“男女平等”に小皇帝として育てられた子供たちの社会への弊害は、超少子化に向かっているこれからの日本でも近い将来起こりえる現象になるかもしれず。いろいろと考えさせられたお話でした。



ポイントをついた切り口は軽妙な話術とともに、大好評でした。ありがとうございました。

Jカフェが終了したあとのティータイムでのことです。

江原さんが1991年、上村千賀子さんに同行なされて米国に渡られ、GHQの女性施策に関わった方々へのインタビューをなさった折、ベアテ・シロタ・ゴードンさんに日本人として、戦後初めてインタビューなさったお話になりました。歴史的なシーンのお話に一同、大興奮！そのときに撮られたビデオは、編集され、デジタル資料として、NVECのアーカイブセンターに収められているということで、後日、その存在も確認されていっしやいます。

このような貴重な資料に対して、JAUWとして、今後、なんらかの展開を、という声があがりました。余談ですが、江原さんのお話の中にもでてきた「女性のおしゃべりが大事」ということは本当です。Jカフェが今後、このような場も提供できたら、と考えております。ご支援、よろしくお願いたします。

(嶋田 記)

#### 【当日の様子 Skype トライアル】

今回、特筆すべきことは、トライアルとしてJカフェをスカイプ (Skype) を使って、会議室の状況を長崎支部に中継したことです。

ちょっとしたアクシデントがあり中断しましたが、今後、パソコン環境を今風にすることで、全国的な会議をしたり、本部や支部のイベントを全国に向けて、快適に配信できることが確認できました。JAUWにとって、大きな一歩といえるでしょう。



その設定やテストは、長崎支部の鈴木千鶴子理事のお力をお借りし、実現いたしましたことを、あわせてご報告させていただきます。ありがとうございました。

Skype の利用の仕方については、理事会で審議していただくこととなりますが、すでに JAUW としての Skype のアカウントは、登録してあります。

#### 【お知らせ】

##### 1. 次回のJカフェ第3回 (予定)

日時：2019年2月27日(水) 13:30~16:00

演題・講師：「キーワードはジェンダー」 城倉純子理事

参加費：1,000円(茶菓付)

申込：JAUW事務局 Fax：03-3358-2889、Email：jauw.shogaigakushu.iinkai@gmail.com

Skype：ご利用はSkype アカウント1つにつき、参加費1,000円。申込は上記宛メールにて。

2. 生涯学習委員会では、今後、イベントなどのお知らせをメール配信いたします。ご希望の方は、jauw.shogaigakushu.iinkai@gmail.com まで、支部名と会員名を明記の上、ご連絡ください。なお、お知らせくださいましたメールアドレスは、JAUW 関連事項以外には使用致しません。また、JAUW での連絡用にいつもご使用になられているメールアドレスである必要もありません。

以上